

討 論

【松浦】

ただいまから、みなさまからいただいたご質問に答えるかたちでパネルディスカッションをさせていただきます。時間も非常に押しておりますし、先生方もまだお話し足りない部分もあるかと思いますが、質問に関してはこちらで選別させていただきます。

では、まず選ばせていただいたご質問をご紹介します。北山先生に対して、「ヌーデイズムは、ファッションの一部に位置づけられるものでしょうか。位置づけられるものとすれば、それはどのような位置づけられるでしょうか。コルセットからの解放が、身体自体の発見のラディカルなことにすぎないのか、あるいはまったく別のものなのか」というご質問がありました。

また、「身体ケアは身体表現でもあるということで、その道具立てとして鏡などが紹介されましたが、道具立てとして体重計はどうでしょうか。体重計の歴史について、何か情報があれば教えていただきたい」というご質問もありました。

討 論

もうひとつ簡単な質問としては、「西洋の音楽家は、ベートーヴェ

ンを除いて、みんなカツラをかぶっているというイメージです。これはいかなる身体表現と解釈すべきなのでしょうか」というものがあります。

【北山】

二つ目のご質問からお答えいたします。身体ケアの道具立てとして体重計についてでしたね。私は、体重計の歴史は把握していませんが、ヒントはあります。パリの場合、一八五〇～六〇年代に大都市改造をやりますが、その一環として、市内各所に公園をたくさん造り、そこに、コインを入れると体重を測れる体重計を設置しました。そんな版画が残っています。私は一九七〇年代の初めに留学しましたが、そのとき公園にまだそういう体重計が残っていました。だから、一〇〇年ぐらい続いていたことになりました。しかし、いまはもうありません。みな個人で体重計を持つ時代になったのですね。

公園に体重計が置かれたこと自体が、当時すでに体重に関する関心が一般化していたことを示しています。今後の宿題として、体重計の

歴史も調べてみようかと思っています。

最初のご質問ですが、ヌーディズムはファッションの一部に位置づけられるのかというご質問ですね。もちろん位置づけられます。でも、ヌーディズムが身体の解放に位置づけられるのかといえは、まったくそうは思いません。

二一世紀に世紀が変わる頃だと思いますが、フランスのテレビでヌーディスト村のルポルタージュを見たことがあります。抱腹絶倒の連続でした。なぜって、たとえば郵便配達夫が素っ裸で、自転車に乗って、郵便物を配達しに行ったり、裸のおっさんがガソリンスタンドで給油していたり、老夫婦が二人仲良く裸で犬のお散歩をしていたり。でも、ヌーディスト村は特殊な空間なのです。自分の欲動をコントロールできない人は住人になれません。

身体に対するコントロールが働いているということであれば、まったく身体解放にはなっていない。みんなが裸の条件下にあるなら、裸が当たり前になる、ということはあるのですが、ヌーディスト村で一生を終える人はいません。何らかの齟齬が生じても不思議はないでしょう。それに、人々は裸であっても、その裸は原始の身体とは違っています。すでにお話したように、私たちの身体は、かならず何らかの意味で文明化されているのですから、いわゆる「自然に帰れ」的なものとしてのヌーディズムはあり得ないということです。

ヴァカンスの期間だけ裸で暮らす、というのも悪くないでしょうが、それはまさにファッションの一部としてのヌード生活ということ。現代のヌーディズムは、主義や文明批判としてのインパクトを完全に

失っています。そもそも、いまでは世の中全体が裸であふれています。コートダジュールの海岸へ行けば、素っ裸に近いような人がいくらでもあります。

カツラについてですが、あれは、制服のようなもの、あるいは、お化粧のようなものでした。一定の階級の人々にとっては、いまのネクタイに近いかもしれません。一七世紀ぐらいから流行り始めて、一八世紀にはとても流行します。そういえば、その頃は男性も白粉や紅をつけていました。ちなみにルイ一四世などはハイヒールさえ履いています。

女性の場合は、カツラも含め、ヘアメイクに異常に燃えた時代がありました。ボンパドル夫人やマリーアントワネットたちが活躍したロココの時代が、それです。数年ほど前に神戸ファッション美術館や東京の目黒区美術館がロココの衣服展を行ったことがあります。そこでは、農場の模型やフリゲート艦の模型など、巨大なオブジェを頭上に乗つけたヘアファッションの例が再現されていました。一八世紀は衣服ファッションがあまりに変わり映えしなかつたので、ヘアメイクなどの細部でうつつぶを晴らした、という説が有力です。

いずれにしても、むしろ自然なものは避けて、自然から遠ざかるほうが重要視されていた時代です。洗練とはそういうものでした。当時も今も同じことですが、「自然」と言いながら、じつは自然ではない、そういうカッコ付きの「自然」を持って嘸すトレンドは、しぶといのです。

私の話の冒頭で見せしましたが、カツラの話は非常におもしろく

て、ヘアメイクなのか、化粧なのか、仮面なのか、衣服なのか、何なのかわからないようなものに、私たちはずっと惹かれ続けているのでしょうか。

【松浦】

ヌーディズムに関して、南先生はいかがでしょうか。

【南】

先ほど、屋外で日光浴をするという自然療法とのつながりのなかで、裸体礼賛の話を少し申しましたが、ドイツでは一九二〇年代のヴァイマル時代に、まさにヌーディズム運動である裸体礼賛運動が、ごく一部ではありますが盛んになりました。この運動の中にも、生改革運動と同じく、社会民主党系の人々もいれば、また後にナチスに行くような人々もいて、さまざまな傾向を含んでいます。

ひとつおもしろいのは、一九四二年ですからナチスの時代、しかも第二次世界大戦で独ソ戦が始まったのちになりますが、ナチスは「水浴規制警察条例」というものを出し、裸体での水浴びを特別な場所では包括的に許可しています。ナチスの時代にはヌーディズムが限定的ですが公的に許されていて、それだけ定着していたことを示しています。しかも、じつは西ドイツでは、一九六〇年代まで、ヌーディズムビーチのような特定の場所で、こうした警察条例が存続していました。このことを、付け加えておきたいと思います。

【松浦】

では、南先生へのご質問を二つほど、ご紹介いたします。

ひとつは「水療法があるのであれば、温熱療法にサウナなども加えられるのでしょうか。身体ケアのひとつになると思うのですが」、二つめは「身体イメージとして、痩身とひとこと言ってしまうですが、もつと形にこだわれば、その志向は健康・スポーツではないかと思えます。たとえば一九六〇年代のゴールデンプラン、トリム運動のような社会的動き、またはテレビの普及も相まって、理想的身体イメージを具体化したものとは考えられないでしょうか」というご質問です。

【南】

ありがとうございます。

まず温熱療法については、私はそこまで考察できておりませんが、ドイツの場合は温泉＋冷泉（冷たい水に入る、あるいは冷たい鉱泉水を飲む）というスタイルがありますし、さまざまな温熱療法的なものがありますので、当然、この時代にもそれはあったと思います。ただ、具体的にどのような治療法があったのかと言われると、いまはまだ調べきれておりません。

サウナ的なものも、当然、あります。系統的・具体的にお答えすることはできませんが、発汗させることによって病気を治療するという発想はありますので、これはあっただろうと思います。

痩身とスポーツについても、スリムをめざす動きがどんどん展開していくって、スポーツという方向に発展していくということは、当然、

あります。一九三六年のベルリンオリンピックはナチスの体制を賞賛するために政治的に利用されましたが、このオリンピックを描いた、レニ・リーフェンシュタールの有名な記録映画などに、まさに瘦身とスポーツとの関係が示されています。

非常に重要な指摘だと思ったのは、テレビとの関係です。それまではどこかに行つて見るものだった身体が、テレビの登場によって、家庭で日常的に見られるようになる、ますますスリムな身体が美しいというイメージが定着していくのだからと思われれます。現代は、たとえばイチロー選手のような身体が理想とされる方向に行っているのだらうと思います。

【北山】

水について私から少し付け加えますと、「自然に帰れ」というルソーの主張がドイツではいろいろなかたちの運動として引き継がれてきたというお話でしたが、ルソーは一八世紀半ばの人で、じつは彼は、入浴の習慣にはきわめて否定的な意見を持っていました。身体を物理的にきれいにすることなどよりも、心をきれいにすべきであるとか、身体は清潔よりも純粹であるほうが大事だとか、いまから見れば理解不可能な見解を主張していました。

これも先ほどお話したように、カトリック教では、入浴はタブーでした。たぶん二〇世紀初めまでずっとそうだったと思います。八〇年代に尼僧を辞めた女性の話を聞いたことがあります。尼僧院や修道院では、身体はひと月に一回か二回、ちよこつと洗うぐらいで、「天

使の匂いというのは、じつは身体を洗わない女性のおいなんだ」などとジョークまがいの話をしていました。

瘦身とスポーツの話ですが、身体造形においては、身体はとにかく痩せていけばいいというものではない、メリハリがないといけないということですよ。一九世紀末、あるいは二〇世紀初めぐらいまでは、コルセットという物理的なメリハリ造形具があつたので、苦しいことは苦しいけれども、コルセットを着けさえすれば、それなりに自分の願う体形に造形することができました。ところが、ファッションのトレンドとしてコルセットが蔑視されることになる、身体造形ができなくなつてしまつた。コルセットがあれば、物理的に肉をあちちへ持つていたり、こちちへ持つてきたりして、適当なシルエットを獲得することができたけれども、それができなくなつてしまつた。こんどは日常的な、地道な努力で身体そのものを造形していかなければならない。身体は一朝一夕に言うことを聞いてくれるわけではないですから、コルセットの方がよほど楽だった、などと嘆いても後の祭りですね。

これについては、京都服飾文化研究財団が、そのものずばり「見えないコルセット」をテーマに展覧会を開催して「身体の夢 ファッションOR見えないコルセット」一九九九、京都国立近代美術館、身体とファッションとの関係について問題提起をしたことがあります。

【松浦】

私自身は、「身体ケアや身体表現というテーマには場違いな人間が

座っているなあ」という感じで、お二人の話をただただ興味深く聴かせていただきましたが、女性歴史文化研究所ですので、女性史的な観点からお話しさせていただきたいと思います。

たとえば、コルセットがなくなってしまうと、道具的な身体の矯正がなくなると、身体を表現しようと思えば自分で体を動かすしかないというのは、なるほどと思いましたが、その一方で、コルセットは女性にとって行動を非常に狭めるものですから、コルセットからの解放＝女性解放というイメージが非常に強くあります。

同時に、コルセットがなくなったからスポーツによって体を鍛えるという面もあると思いますが、一方で、女性たちが家のなかに閉じこもっていたところから外に出ていくようになりました。乗馬も含めたドライブや、当時流行り始めたテニスやアーチェリーなど、コルセットから解放される少し前に女性の間で流行っていたスポーツはいろいろあります。でも、そうしたスポーツをしようとすると、やはりコルセットはじやまになるので、スポーツをするためのファッションがけっこう考案されて、そのファッションの動きが「やっぱり、もうコルセットなんて要らないわ」というふうにさせたのではないか、というのが私の印象でした。でも、先生のお話を伺って、そういうイメージもあるのかなと思いました。

それから、コルセットも含めて、なぜ女性が身をやつすのかといえは、自分の内面を云々ということもありますが、世間一般的な価値観に照らし合わせて、自分が美しく見られたい、とくに異性から美しく見られたいということもあったと思いますが、この「異性からの目」

というのは、どんな感じだったのでしょうか。

【北山】

けっこう難しい心理的なメカニズムの話になってしまいますが、なぜ一九世紀にコルセットが大流行したのかといえば、いくつか産業的な理由もありますが、ある時点で、コルセットをした身体が人並みの身体になったということです。逆に言えば、コルセットをしない身体はみっともない身体になった、ということ。異性の目うんぬんということよりも、コルセットをしないということは、ひと前で裸をさらすような恥ずかしい、はしたないことなんだ、ということになってしまった。そう考えたほうが歴史的真実に近いと思います。

では、なぜ二〇世紀の初めにコルセットのないファッションが登場したのか。私は次のように考えています。

ポール・ボワレという人は、じつは非常に女性抑圧的な人でした。決して女性の解放のためにコルセットなしのドレスをつくったなどとは思えません。そうではなくて、彼の頭の中にあつたのは、どうやれば新しいドレスの形態ができるかという思いだけだったと思います。

一九世紀末から二〇世紀にかけて、コルセットありのドレスでは形態的に行き詰まっていた、何か新しいことをやりたいと思っていたはずです。当時は東洋趣味が大人気の時代でしたから、トルコや中国、日本の着物のように、女性服からコルセットを取り除けてみたら、どんなシルエット造形が可能になるか。

その思案の結果が、ポール・ボワレのコルセットなしのドレスの発

表だったと思います。後にポワレは、女性身体の解放みたいなことを言っていますが、あれは後付けの言説です。

女性の身体に真に配慮したドレスを作ったのは、ポワレの晩年に続々とデビューする女性デザイナーたちでした。なかでも、マドレーヌ・ヴィオネはその筆頭でしょう。そして、そのヴィオネの修行時代に計り知れない影響を与えたのが、イサドラ・ダンカンの踊りだったと私は推測しています。ヴィオネはじめてダンカンのダンスを見たのは、ロンドンだったと思います。ヴィオネは、古代ギリシアのペロースにヒントを得たドレスを好んで作っています。体をスポッと入れてしまえばそれでいいような一枚布に近いドレスです。しかし、ヴィオネのドレスは、肉付きは比較的好いけれども長身の、スリムな身体、そういう体型に合うようなドレスで、いわばギリシア的な女性像を理想の身体像として出していたことを見落としてはならないでしょう。

したがって、コルセットからの解放は、身体解放の一面もあるけれども、同時に、二〇世紀の女性に対して女性身体の理想像を示してしまったこと、しかも今度はコルセットの助けを借りずにその理想像に向けて各自が身体造形に勤しむように仕向けてしまった面のあること、こうした点もここで指摘しておかない訳にはいかないでしょう。

イタチごっこと言われればその通りです。そういうメカニズムなのです。

【松浦】

そうしますと、コルセットなしの新しいスタイルをつくったのも男

性ということになりますか。

【北山】

いえ、男性のデザイナーがつくったのですが、真に女性のためのコルセットなしの衣服をデザインしたのは、いまお話ししたマドレーヌ・ヴィオネと、シャネルスーツやシャネルドレスをつくったガブリエル・シャネルです。

【松浦】

それはファッションとして定着し、みんなから美しいものとして認められたのですね。そこが大事なことかなと思います。

【北山】

そうです。先ほど松浦先生が言われたように、一九一八年に第一次世界大戦が終わりますが、戦争中から女性たちは外に出て、工場などいろいろなところで男性同様に仕事をせざるを得なかった。そのような雰囲気の中でシャネルは、現在のストリートファッションを思い起こさせるような感覚で、仕事着としての、女性服のあるべき造形美を作り出したのです。だから、熱狂的に受け入れられたのです。

でも、戦後のシャネルはまったく別の文脈で扱う必要があります。

【松浦】

戦後のシャネルの変化については、本当はきょうのお話の中身に

入っていたのですが、そこまで行けませんでした。

【松浦】

では、もう少し難しいご質問に移らせていただきます。

まず、「一八世紀と一九世紀では身体表現と身体ケアのあり方が大きく変化して、一八世紀は行政学の世紀であり、領土から人間へとポリスの目的が変わり、福祉の理念まで登場してきたとおっしゃいました。しかし、実際の福祉国家は二〇世紀になってからですよね？」というご質問です。

【北山】

非常にいい質問だと思います。国家統治の理論という研究分野でいえば、一八世紀ぐらいから住民を対象にした統治理念をどうやってつくるかが重視されてきますが、そのなかで健康政策はとても重要な柱をなしていました。

現代の話にしても、なぜ日本がこれだけ落ち込んでしまったのかというと、子どもが減ってしまったからです。それで、いまの政府は「子どもを増やせ」と言っていますが、そんなことをやっても増える訳がありません。私たちが自分の毎日の生活をいかによりよくするか、安心できる生活ができるのか、そういう問題を自分自身の問題として考えるようになって初めて、いろいろなことが可能になるのです。

頭のいい理論家は、そのことに気づきました。社会の多くの市民が、昨日よりもいい生活をしたい、それが可能なのだという思いを持つよ

うになって初めて、みんなが「自分の健康にも気をつけよう」とか「清潔な服を着よう」というふうになるのだ。そのことに気づいて、そのための仕掛けを考えたのがポリスの理論家だった訳です。

しかし、健康政策（ここでは福祉政策、と言い換えてもいいです）が、真に軌道に乗り出すのは、国の思惑と住民の願いが交錯したときからなのです。一九世紀の間、そういうことはなかなかうまく行きませんでした。しかし、底流では、その動きが模索されていました。都市の職人層を中心にして、互助組合的な運動がいろいろなところで起こっています。職人たちが、自分の仲間が病気になるって仕事ができなくなる、社会的にどんどん落ちていくのを見ていました。明日は我が身、です。そこで、互助組合的なものが生まれます。パリの仕立て職人の場合、それは一八三〇年、四〇年にはすでに議論されています。

このような、住民のほうからのいろいろな運動を、国家は統治の仕組みに入れていかざるを得なくなる。その方が、得策だったからです。こうして、私たちと国家の統治を司っている人たちとの間で力関係のバランスが出来上がる。私たちの福祉政策はこのようにして成り立っているはずなのです。ですから、私たちが自分たちの要求をきちんと主張していかない限り、国家統治に都合のよい福祉政策しか出てこないのは当たり前なのです。なぜなら、現実化された政策や施策はバランスの上に乗った拮抗関係の産物なものですから、私たちが自分たちにとって最良の政策を対案として打ち出すことによってしか、私たちの願いに近い政策は実現しないからです。二〇世紀になってようやく「福祉国家」ということが言えるようになったのは、そうした歴史

的努力の積み重ねの結果なのです。ですから、積み重ねの努力を緩めたり、諦めたり、情けにすぎたりすれば、国はたちどころにして、国に都合のよいことしかしないのは、当たり前なのです。じつは最後にこうした話をして終わりたいと思っていましたので、非常にいい質問でした。

【松浦】

福祉国家というのは、たしかに二〇世紀の概念であって、実際に政策として各国がそれを採り始めました。(ただし、先生が何度もおっしゃいましたように)たとえば私が専門とするイギリスでの福祉国家の萌芽は一九世紀末から二〇世紀初めに出たといえます。しかし、その背景にはじつは帝国主義時代に突入し、「世界の工場」からずり落ちたイギリスが、なんとか巻き返すために、つまり国力を増強するために、貧弱で、兵士にすらなれなくて、ましてや工場労働者としても優秀ではない国民をなんとかしなければいけないという認識がありました。ようやく国民の生活を具体的によくするための政策が採られはじめます。それが、いまわれわれが言うところの福祉政策のはじまりという面があるのです。

それから、福祉政策の最たるものとしては母性保護や児童保護といわれるものが多々ありますが、これは戦前の日本の「産めよ、増やせよ」の政策と同じで、将来の兵士・兵力になる者を確保するために、生まれてくる子どもたちを増やすだけでなく、生まれてきた子どもたちが健康に育ち上がるために、さまざまなサービスを国家が提供する

という側面が強いです。その意味では、まさに一九世紀末の帝国主義の時代、そして二〇世紀の二つの戦争が、児童福祉を発展させたとも言えます。児童「福祉」なのですが、そうした福祉政策は、「国力増強」という国家の都合によってかなり生み出されている部分があるのは、事実だと思います。

それに対して、一方で、イギリスでもそうですが、労働者側からの突き上げや要求も少しはそこに反映される…というよりは、むしろ修正させていきます。たとえばイギリスで最初にできた健康保険(いわゆる国民健康保険)の内容を、女性たちの運動で修正させたという事実があります。つまり、彼女たちは、現実の労働者の女性の視点から今の福祉政策の根幹である国民健康保険を見て、「これはおかしい」という声をあげて、変えさせた部分があるのです。

ですから、先ほど北山先生が「ちゃんと提言していかなければいけない」とおっしゃったのを、「ああ、そうだった」と思いながら聴いておりました。

【南】

ドイツも、基本的には同じです。ドイツの場合は「社会国家」という表現をしますが、一九二〇年代のヴァイマル共和国の、いわゆる現代的な民主主義が初めて実現した時代に、福祉の概念が出てきました。その前の一九世紀の第二帝国の時代に、ビスマルクが社会保険を導入したのですが、それは帝国主義時代の国益のためにという発想のほうが強いものでした。それがヴァイマル期になると、国民や民衆の側に

バランスが動いたわけです。

しかし、ナチスの時代になると、それがまた国益のほうへと動いて、ようやく戦後、西ドイツが、経済成長によって経済的に余裕ができるなかで、イギリスとは違った意味での社会福祉を実現していった、という流れになると思います。

【松浦】

もうひとつ、ご質問が出ています。

【北山】

それは私に対する質問です。「身体表現の手段として、なぜ顔を強調したのか」というものですが、先ほど私がお話したのは、表情の研究がまともに行われるようになったのは一六世紀以降のことで、それは、その頃になって、自分の気持ちを言葉で表すことも含めて、表情を出すことが社会的に許容されるようになったということ、そして、それに伴って、表情の研究も盛んになった、ということだけです。

それ以前は、頭骨の研究でしかありませんでした。それから、骨相学や顔相学というのは昔からありました。たとえば「ライオンに似た顔の人はライオンの性格を持っている」とか、「ウサギに似た顔の人は臆病だ」とかというような、似非学問です。表情の研究は、それらとは違って、たとえば笑いなどいろいろな表情はどうやって表現されているのかという研究が出てくるわけです。

ところが残念なことに、こうした表情研究は、一六世紀以降のエチ

ケットなどの社会的要請の文脈のなかに取り込まれてしまつて、表情をどうやってコントロールするかなどといったお作法の技術にされてしまいます。その結果、やってはいけないこと、逆に守らなければいけないこと、あるいは知っていなければいけないこと、などというふうにマニュアル化されて普及します。食卓の作法も、同じ文脈の中ですごく重要視されます。

そういう、身体に関する一貫した流れのなかで顔の話にも触れたわけですから、顔の研究だけを重視している訳ではありません。

【松浦】

「顔は心の窓」とおっしゃったのを、私は「内面を表すものとしての表情」というイメージで伺ったのですが、その表情を外に出しても許されるようになったのがこの時期だとおっしゃいました。それが私にはとても印象深い言葉として残っていますが、その点はいかがでしょうか。

【北山】

それは、漠然とした「あの時期に」ということです。歴史を研究していると、非常に面倒くさいことに、いつごろ、どういう現象が起きたかというのがなかなか確定できない。確定するための「これだったら絶対に大丈夫」というのは、書かれた文書や保存遺物などの物的証拠ですが、物的証拠がないものについては、「とりあえず、こういうことだ」とは言えるけれども、その先のことは言えません。

【松浦】

エラスムスのお話しは非常に興味深いというか、うちの学生も、ああいうのを見て、「ええーっ、こんなことだったのか」と驚いています。

【松浦】

最後に、付け加えてお話しになりたいことはおありでしょうか。

【北山】

南先生に質問したいことがあります。ドイツの場合、「健康な生活のためには肉食をしない」という流れがあるということでしたが、一九世紀のフランスはまったく違う文脈です。

この時代のフランスは、飢えて、ぎりぎり死なない人が一〇〇人のうち八〇人いて、残りの二〇人だけが明日のご飯の心配をしなくていい、という状況でした。当時のヨーロッパでいちばんの緊急課題は、パンをちゃんと食べられるようになるか否かだったと思います。パンにもいくつカレベルがあつて、飢えの恐れが減れば、次には黒パンではなくて白いパンが食べたいし、白いパンが食べられるようになる、次にようやく肉が食べたい、というふうには欲求が高まっています。エリート階級はずつと肉食をしていますが、一般民衆はほとんど肉食をしていない。肉を食べるのは一年に二回ぐらいで、それもポトフという肉と野菜を煮込んだ料理（主にフイオンを珍重した）が通例で、グリルした肉などは絶対に食べませんでした。

そのなかで、第一次的に肉食が生活改善の到達目標になるわけです。

それが終わって、肉が食べられるようになってくると、その後によつと栄養学的に「よりよい食生活をしましょう」というふうにな変わってきます。

カロリーの摂取量を見ても、一時は三〇〇キロカロリーぐらいまで行くのですが、その後はみんな、下がるほうに努力するようになっていきます。だから、時系列のなかに置いて考え直さないと、歴史的现实から離れてしまいます。

もう一点だけ付け加えさせていただくと、一九世紀後半に、ミシュレという歴史家が『女性』（一八六〇年）という本を書いています。このなかで、ミシュレは、「最近ではフランス人もだんだん肉食をするようになった。女の人の肉食が増えれば、彼女たちがだんだん肉感的でふしだらになっていくおそれがある」などといったことを書いています。ということは、庶民や女性にとつて、肉食はそれほど日常的なものではなかった、そういうふうには考えられませんか。

【南】

本当におっしゃるとおりでして、私が本日お話しした生改革運動は、労働者とは無縁の運動と考えていただいたいと思います。裕福で、肉を十分に食べられるような階層のなかから生まれてきた運動です。一九世紀ドイツでも、労働者は肉を相対的にわずかししか食べられませんでした。肉の消費量が社会的格差をあらわしておりました。

ただ、もうひとついえば、一九世紀半ばから後半に、科学的に栄養

を説明する栄養学が出てきました。この時代の栄養学は、動物性たんぱく質、すなわち肉を十分摂取することが健康をもたらすのだという立場で、これが当時の科学的な言説だったわけです。私が紹介しました生改革運動は、それに対するアンチテーゼでもあるということです。つまり、レベルがずいぶん違うところでの話になっていくのですが、そこを私はうまく説明できませんでしたので、少し補足で説明させていただきます。

【北山】

先ほど、スポーツの話が出ましたが、ここで補足させていただきます。松浦先生のおっしゃったように、エリート階級はスポーツをずっとやってきました。男性でも女性でも、そうです。たとえば乗馬は男女を問わず日常的な活動で、ずっとやってきました。貴族階級は、身体を動かすことをとても重視してきた階級なのです。

これに対して、一九世紀のブルジョア階級については、これもある種のカリカチュアではあるのですが、彼らは、運動をしないで、うまいものばかり食べているから、ぶくぶくと太ってしまうのだというイメージで描かれています。それが一九世紀の後半になると、ブルジョア階級も貴族階級のライフスタイルを真似るようになります。

そうすると、貴族階級もブルジョア階級も含めて、当時の金持ちエリート階級はみんな、スポーツをやるようになるのです。かつてのように乗馬もあったし、水泳(水浴)もあって、ノルマンディーの海辺に別荘ができたたりするのは一八三〇年ぐらいからです。その他にも、テ

ニス、ゴルフなど、いろいろなスポーツが行われています。でも、それらは限られたエリートの人たちの活動でした。ご存じのように、スポーツウエアは、二〇世紀ファッションの重要な発想源のひとつとなりますが、そのことがもつ意味はとても複雑で、歴史社会的にも分析する価値のあるものです。その点を、ここで敢えて付け加えておきます。

フランスで、民衆層が、そういう、スポーツや余暇のあるライフスタイルを自分のものとして要求してもいいのだ…となるのは、ようやく一九三〇年代のことだと考えていいと思います。ヴァカンスの習慣は、一九三六年のヴァカンス法によって保証され、いわゆる一般的な余暇の暮らし方が労働者の権利になってきたと、私は考えています。

【松浦】

ありがとうございます。最後に、このような質問も出ておりました。これはやはり、研究所の所長である南先生からお答えいただくと思っています。「日本の社会が、とくに若者が夢を持てる未来になるための方策をご教示ください」というご質問です。

【南】

それは私の個人的な立場で答えられるような問題ではありません。日本史も世界史も含めた歴史研究者が、過去の歴史をひもときつつ、どのような未来像を提示することができるのかというのは、おそらく日本の歴史学界全体に課せられた問題ではないかと思えます。いまは

抽象的にお答えすることしかできません。歴史学科の学科主任の松浦先生、文学部長の増淵先生にお聞きしても、たぶん同じ答えだろうと思います。

大きな意味では、学問が社会にいかに関与するかという大きな課題を提起していただいたものだと思われ、それがわれわれ歴史学者に課せられた社会的な任務であるということ強調して、私の閉会のあいさつに代えさせていただきます。(拍手)

【北山】

きょうは一九二〇年代以降の話も用意してきましたのですが、現代の話ができませんでした。ファッショントレンドは、世の中の政治や経済の流れと密接に関連しています。しかし、短い尺度で判断を加えると、大きな流れを見誤ってしまいます。その点に気をつけて、史料として活用するならば、たとえば政治や経済の理念の変遷など長いスパンの分析とともに活用するならば、すごく有効な手段として使えます。私がかような話題にしたような身体性や親密性の歴史の理解にあたっては、不可欠の素材です。

一九世紀は消費の世紀で、いまもそれが続いています。消費は、統治の手段として非常に有効だったのです。日本でいえば、一九六〇年代から九〇年代はじめまでが、そうした時代でした。しかし、いまは消費社会そのものが行き詰まるころにまで来ています。

自由も、平等も、人権も、それらに関する議論は、これまで、いつも消費社会の存続を前提にした枠組みの中で行われてきました。私た

ちは、一九世紀から現在まで続いてきた消費社会という大きな仕組みのなかに閉じ込められているという現実、この現実を対象化して、研究や議論を組み立て直すことが求められているように思えます。歴史の役割というのは、これまでにどういう流れがあつていまの仕組みが作られ動いてきたのかを俯瞰する、ということにあります。ですから、私たちとしては、いまの質問のように「どうすればいいのか」と問うのではなくて、むしろ「どうしたらいいのだろうか？」と自分自身に問いかけることのほうが大事なのかなと思います。

歴史的な研究は、そのための種々の参考資料としてもあるのだ、ということを実感いたしました。

【松浦】

ありがとうございます。それでは閉会とさせていただきます。きょうの講演者であります、北山先生と南先生に盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)